記念講演　略歴

座　長

池端　幸彦　（いけばた　ゆきひこ）
日本慢性期医療協会　副会長
医療法人 池慶会　池端病院　理事長・院長

略歴

学歴

1968年卒業	福井大学教育学部（現・教育地域科学部）附属小学校
1971年卒業	同　附属中学校
1974年卒業	慶應義塾高等学校
1980年卒業	慶應義塾大学医学部

経歴

1980年	慶應義塾大学医学部卒業、同大学医学部外科学教室入局
1981年	浜松赤十字病院　外科
1982年	国立霞ヶ浦病院　外科
1983年	慶應義塾大学病院　一般消化器外科助手
1986年	池端病院　副院長
1989年	池端病院　院長（～現在）
1997年	医療法人池慶会　理事長（～現在）
2008年	社会福祉法人雛岳園（すうがくえん）［愛星保育園・たんぽぽ保育園］理事長（～現在）

現在の主な役職

（全国）
日本慢性期医療協会 副会長
中央社会保険医療協議会（中医協）委員
社会保障審議会 医療保険部会 構成員
厚労省 高齢者医薬品適正使用検討会 構成員
日本医師会 地域包括ケア推進委員会委員長
日本医師会 代議員

（県内）
福井県医師会 会長
福井大学医学部 臨床教授
福井県医療審議会 会長
福井県慢性期医療協会 会長
福井県介護保険審査会 会長
全日本病院協会 福井県支部長

主な資格

日本外科学会認定医、日本消化器外科学会認定医、日医認定スポーツ医
日医認定産業医、認知症サポート医、介護支援専門員

演　者

迫井　正深　（さこい　まさみ）
内閣官房新型コロナウイルス等感染症対策推進室長・内閣審議官

略歴

1989年～	東京大学医学部卒業、東京大学附属病院、虎の門病院等で外科臨床
1992年～	厚生省入省、米国ハーバード大学公衆衛生大学院（公衆衛生学修士）
2005年～	厚生労働省大臣官房健康危機管理室長、広島県福祉保健部長、 厚生労働省保険局企画官、老人保健課長、地域医療計画課長、保険局医療課長を歴任
2018年7月～	大臣官房審議官（医政局担当）
2020年8月～	医政局長
2021年10月～	現職

ML

新型コロナパンデミックを踏まえた、これからの慢性期医療への期待

内閣官房新型コロナウイルス等感染症対策推進室長
迫井　正深

新型コロナウイルス・パンデミックは全ての国、あらゆる社会の局面に変革をもたらしつつある。

感染症対策を担う「医療」はどの国においても大きく揺さぶられ、わが国もその例外ではない。医療のあらゆる部門が例外なく、地域特性や感染状況に応じて試された。感染の“波”を重ねるごとに感染者数は膨れ上がり、わが国の医療提供体制の隅々に渡るまで、徹底的にチャレンジされた。

流行の初期段階では保健所対応やPCR検査が大きくクローズアップされた。しかし、感染拡大を重ねるにつれ、人々はより身近で根源的な問題に向き合い始める。例えば「発熱時の医療はどこで提供されるのか？」という極めてシンプルな国民の求めに医療界はどのように応えてきたのだろうか。わが国の医療提供体制の特徴であり長所ともされてきた、フリーアクセス、診療提供者側の高い自由度を基盤とする柔軟な“かかりつけ医”の概念は、ここにきて患者・医療提供者の双方に大きな課題と疑問を投げかける。パンデミックは図らずも、わが国の医療システムに内在する根本的・構造的な多くの課題を露わにし、同時に、全ての国民が、普段なら見聞きすることもないこれらの課題を目の当たりにする機会を提供している。

コロナ医療に係る社会や国民の認識も変わっていく。初期の段階では、ECMOやワクチン・治療薬などの先端技術や急性期病床の逼迫に社会の関心は集中した。しかし、昨今の爆発的な感染拡大期では、人々の日常生活場面でパンデミック対応が求められる。特にオミクロン株以降では、まさに慢性期医療の領域が主戦場となり、在宅医療や高齢者ケアなどの地域密着型医療において、人々に寄り添うコロナを踏まえた地域医療の姿が求められたのである。

2022年秋の時点でこのパンデミックは事態進行中の状況にある。このような前提で、コロナ対応に係る医療提供体制構築の経緯と、この過程で浮き彫りとなり、これから私たちが向き合っていくであろう、わが国の医療提供体制の課題やその背景とともに、これらを踏まえた慢性期医療への期待について、私見を交えながら考える。